

イエール大学サマーセッション参加報告書

東京大学大学院工学系研究科
社会基盤学専攻国際プロジェクト研究室 修士1年

私は、General English for Graduate Student という6週間のプログラムに参加させていただきました。

この報告書は主に3つの目的で執筆します。1つ目は、プログラムに参加するに当たって持っていた目標がどの程度達成されたのかの自己評価、2つ目は、来年以降のプログラム参加者のためのアドバイス、3つ目はこの短期留学プログラムの今後の運営に当たっての意見です。

総合的な感想として、このプログラムは国際感覚を磨く上で良い経験になる上に、英語の効果的な訓練の場を提供してくれるので、非常に良いプログラムだと思います。また、比較的週末の回数も多いのでアメリカ観光の時間も取れますし、様々なバックグラウンドを持った友人を作ることができるので、夏季休業を兼ねた旅行としてもとても楽しいと思います。しかし、単位の取得や大学からの補助金などの点において、満足のいかないところがあるのも事実です。折角、イエール大学で正式な講義を受けられるのですから、制度的な面でより充実したサポートを受けられる方が良いと思います。

① 目標達成度の自己評価

英語力という面から言えば、プログラムの参加によって飛躍的に英語が出来るようになったとは言えません。しかしごく控えめに言って、少なくとも総合的な英語の能力を深化させる機会にはなりましたし、どのような場面にも自分の英語力だけで対応することができるという自信を持つ事ができました。また英語の能力を向上させる様々な方法を学ぶことが出来たので、今後自分の能力をさらに高められるポテンシャルを持つ事が出来たと思います。今後の自分の努力しだいで、どこまでも目標達成度を上げられることができると確信しています。

海外の学生との交流という面から言えば、幅広い国籍・専攻・年齢の学生と触れ合えたという点で、非常に良い経験になったと思います。授業時間以外も一緒に寮で過ごすので、毎日のご飯を一緒に食べたり、週末にはニューヨークやボストンに旅行に行ったりするなど、かなり濃い付き合いをしていました。自分の視野を飛躍的に広げると共に、英語やコミュニケーションの能力の練習にもなりました。

② 来年度の参加者への助言

New Haven はあまり治安の良い街だとは言えません。ニューヨークほどでは無いですが、年に何回か凶悪事件が発生し、毎日のように消防車やパトカーのサイレンの音が街で聞こえます。暗くなってから一人で街を出歩くのは、よほどの用事が無い限りは控

えた方が良いでしょうし、その時も、必ず友達か校内の警備員(2 walk service)と一緒に歩くべきです。私も、夜中に寮からすぐ近くのATMでお金を引き出そうとした時、後ろから浮浪者のような人にずっと張り付かれ、怖い思いをしました。幸い、何か実害を被ったわけでは無いですが、感じた恐怖は非常に大きかったです。

また、New Haven はあまり交通の便の良い街だとも言えません。市内の公共交通機関は市バスしかなく、寮付近には停留所が無いので一度も利用したことはありませんでした。また、Amtrack と Metro North という鉄道が通る Union Station は街中から遠く、寮からは歩いて 20 分くらいはかかります。道沿いにはあまり治安が良いとは言えないエリアがあります。そのため、大学が大学関係者専用の巡回バス・シャトルバスサービスを無料で提供しています。24 時間・365 日利用できるのも、市内の移動にはこれが最も便利です。

しかし、そのバスサービスも市外へは連れて行ってくれない(JFK 空港を除く)ので、郊外のショッピングセンターへの買い物には少し苦勞します。もっとも、大抵の日用雑貨や衣服は寮付近の大学生協(Yale book store)や雑貨店で手に入るのも、郊外のショッピングセンターに行く必要はほとんどありません。特に雑貨店は 24 時間オープンのお店で、店内にデリが付いています。緊急に何かが必要になったときや、夜中に週末旅行から帰って来て夕飯を済ませたいときなどに重宝しました。

アメリカで手に入らないものはほとんどないので、日本から持っていきべき日用品などはほとんどありません。日本食ですら、雑貨店で手に入れることができます。もしあえて挙げるならば、フォーマルなドレスをお勧めします。使う機会は少ないですが、フェアウェルパーティや国連への見学会など、1~2 度は必ず着る機会があります。向こうで突然調達するのは、店探しや言語の問題から難しいと思います。どの機会もドレスコードがあった訳では無く、カジュアルウェアの参加者もいましたが、準備しておくことは無いでしょう。

服装で言えば、今年の夏はかなり日差しが強く、気温も日本の真夏ほどあるのではないかと感じるくらいでした。湿気はそれほど無いので快適に過ごせますが、ドミトリの個室には冷房が効かず、かなり暑い思いをしました。暑いときはほぼ全員が T シャツ半ズボンになるような社会ですので、日本以上に軽装で過ごせるように調節すると良いと思います。

③ 今後の運営への意見

イエール大学のサマーセッションに、大学からの補助金付きで参加できること自体は非常に良い制度だと思います。しかしより良いプログラムにするために改善すべき点は何点かあると実際に参加して感じました。

・若ければ若いほどこのプログラムに参加する意義は大きいと思いますし、この経験をより大きく大学生活に反映できる 1~3 年生こそこのプログラムに参加するべきです。実際、秦華大学やソウル大学などの中国・韓国系学生でインテンシブコースへ参加した学生は、ほとんどが 18~20 歳の大学 1~3 年生でした。東京大学からの参加者は本郷

中心で広報活動をしているためか3・4年生と大学院生が中心でしたが、教養学部生にも積極的に広報・説明会を開催し、参加者を募ってはどうか。

東京大学から単位が認定されないことは、せつかくの努力を正当に記録することが出来ないまま終わるわけなので、非常に残念に思います。多くの参加者が感じたことですが、ELIといえども授業の質は東大のそれより高く、日々課される宿題も相当なものです。例えば私のクラスでは、1日のうちに20~30ページのコースパケットを呼んでくるということもありましたし、6~7ページのエッセーを数日以内に要求されるということもありました。他のクラスでも、それ以上の課題と授業内容が課されたと聞きます。私の感覚としては、東大での講義以上に真面目に参加し、課題をこなしていたと思います。東大での単位の認定はぜひ検討すべきです。

また、単位の認定を行わないことは、わざわざテスト期間を跨いで参加する動機を損ね、参加者を大きく限定してしまうことにもなります。特に大学1~2年生が参加する場合、進学振り分け制度のせいで単位の付かないこのプログラムに参加することはほとんど不可能でしょう。先述の駒場生への積極的な公募の一つの戦術として考慮してはどうか。

16/08/2009

Yale Summer Seminar Business に参加しての報告書

2009年6月末から8月中旬までの6週間にわたるYale大学におけるビジネスコースに参加させていただける機会を、東京大学の学生交流企画係が提供してくれたことに非常に感謝しており、そこで感じたことを、授業内容、授業外の暮らし、日本人が海外に出ていくことという3点に関して所感を述べることで報いたい。

第一に、授業に関しては、法学コースの陰に隠れていたためか、12名(途中から1名増加)と少人数で構成され、ノルウェー(1)、オーストリア(1)、スペイン(3)、メキシコ(1)、チリ(1)、ベネズエラ(1)、中国(3)、日本(1)と出身国も多様性に満ちたものであった。その分、非常に仲が良く、最初に顔をあわせてから6週間後には誰もが自分たちが素晴らしいチームであったかを感じていた。英語のレベルはひとによってマチマチであったが、誰も自分の英語力を恥じることなく、意見を述べられ、お互いを尊重できる雰囲気があった。授業内容は、月曜から金曜の午前のクラスと月、水曜のオーラルコミュニケーションのクラス、火、木曜のライティングのクラスがあった。午前のクラスに関しては、組織構築、投資分析、マーケティング等ビジネス全般に求められる見識をトップビジネススクールで用いられている論文やケースが収められた1000ページのテキストをもとにディスカッション形式ですすみ、集大成としてグループワークでビジネスプランを作成し、プレゼンテーションをおこなった。講師陣もひとり中心的存在がいたが、学ぶ分野によってそのエキスパートがきて教え、全部で4人の講師がいた。これは、学ぶ内容以外にも、それぞれの授業スタイル、哲学観など様々なことを学べた点で非常によかった。オーラルコミュニケーションに関しては、英語が母国語でないひとのための英語の発音の仕方を学んだり、スピーチやプレゼンテーションについて録画して分析したりした。ライティングの授業では、ビジネスシーンで用いられるライティングの書き方を学んだり、CSRの教科書をもとに、ビジネスの社会的責任を議論しあったりした。これは午前のクラスがいかにお金をつくるかということ学んだとすれば、多様な人々を巻き込んでいくうえでどのような責任が同時に付きまとうのか、という点で午前の授業に厚みをもたせてくれるものであった。MBAの導入という位置づけなので、もしアメリカでMBAを取ろうとしたならば、どのような生活になるかということ自分のなかで具体的なイメージをもつことができたことが最大の収穫であった。

第二に、授業外の暮らしも、月曜から金曜までは勉強に精を出し、土日は遊びに精を出すということを奨励する雰囲気があったので、非常に充実したものであった。イェール大学があるコネチカット州は、ニューヨークシティとボストンの間にあるので、様々な活動を現地ですべた友人と企画して行うことができた。またサマープログラム自体もブロードウェイミュージカルツアーなどを企画してくれていた。その中では、国際連合へ

のツアーが国際関係論を専攻している自分にとって非常に意義のあるものであった。国際連合ではイェールに学びに来ている学生ということで、様々な ambassador が様々な話をしてくれ、個人で旅行客としていったならば、聞けなかつただろう話をたくさん聞くことができ、また国際連合が実際にどのようなところであるかこの目で見ることができたことが大きいからである。

このように、イェール大学では様々な経験を積むことができた。私はA I KOM 交換留学で約1年ものあいだ、ニュージーランドで生活をすることができたが、それと比べても非常に刺激的な6週間を過ごすことができた。授業だけでなく、アメリカの価値観や社会の崩壊など様々なことを感じる機会に恵まれたし、なにより尊敬できるたくさんの仲間に恵まれていたからである。現地で出会った講師が、近年日本人の生徒数が減少したことを何度かつぶやいていたが、サマースクールでこれほど充実した機会を提供できる場は、イェール以外にないと思えるので、今後東大生からの参加者が増えることを望むばかりである。それには、東京大学の体制が整っていないことも事実である。これからは、グローバルに活躍できる人材の育成が望まれ、そういう人材を育てようという意識もあるのに、事実はそうっていない。東京大学の教授のなかには、イェールのサマースクールに参加するために受けることができなくなってしまった試験の代替案を生徒と考えようともせず、一方的に単位をあきらめるよう通告した方もいらっしやった。そして、交流企画係のなかにも、学生は試験期間とかぶっているのを承知で自ら望んで参加しているので、単位をあげなくても大丈夫と通達した方もいるようである。これでは、学生が参加を自粛しようとするのも無理のないことである。この素晴らしい機会を利用できる学生が増えるような体制ができあがることを願う次第である。

イエール大学夏期英会話研修報告書

1. はじめに

6月27日から8月7日までの6週間、イエール大学夏期英会話研修に参加することができた。私が参加したのは、大学院生のためのコース（Graduate seminar）であった。概観として、勉強面でも、人との出会いという面でも、非常に充実した6週間となったと感じている。

以下、2では受講したコースの概要について、3では授業外の活動について、最後に4では今後この経験をどう活かしていきたいか、またこの研修がさらに良いものになるにはどのような工夫が必要か、述べていきたい。

2. コース概要

2-1 クラス編成

大学院生のためのコースをとっている生徒は19名であったが、少人数制にするためか、さらに2つのクラスに分けられた。分割の基準は能力別ではなく、講師が便宜的に定めたものだった。私の所属したクラスは10名で、国別の内訳は、中国2名・韓国2名・ボリビア1名・メキシコ1名・日本4名であった。うち5名はこれからイエール大学大学院に入学予定で、準備のために受講しており、私も含めた残りの5名は英語の向上を目的としていた。それぞれ専門が異なり、音楽・現代美術・建築・物理・都市計画・英語教育・水資源・経済・国際関係、とかなり多様であった。

2-2 授業内容

Speaking, Writing, Presentation Skillの3つの授業があり、それぞれ違う講師が受け持った。これら3つの授業を午前中（9時から13時）に受け、午後は週3日Speakingの講師が行う補講があった。

Speakingの授業では、聞く人に負担を強わず、言いたいことをきちんと伝えるために必要なスキルを学んだ。具体的には、リズム・リンキング（linking）・イントネーション・発音などを講師が作成した教材に沿って学んだ。毎日出る課題としては、Audacityというソフトを使って、自分が英語を話す声を録音し、それを自己評価するというものが主だった。この課題のおかげで、普段は意識しない自分のspeakingの癖やできていると思っていたができていない点が明らかになったり、学習したスキルの効果を感じることができた。

Writingの授業は、学术论文を英語で書くために必要なスキルを身につけることを目的としていた。1週間に1度、講師が提示したテーマに沿ってエッセイを書くのが課題で、最初は1~2枚からはじまったが、最後のエッセイは5~6枚という分量が求められた。今まで日本で勉強してきたWritingでは間違っている点がたくさんあるということに気づき、たとえば1人称や2人称を使わないという決まりやイントロダクションを工夫するという指導を受けて、目からうろこが落ちるようであった。講師から赤ペンでコメントがぎっしり

書き込まれて返却されたエッセイは最高の教材であった。

Presentation Skill の授業では、自分の研究分野について、(専門を同じくする聴衆に対してではなく) 一般聴衆に説明する際に必要となるスキルを学んだ。1週間に1度、クラスメイトの前でプレゼンテーションを行うのが課題であった。そのプレゼンテーションに対しては、講師からとクラスメイトからフィードバックをもらうことができ、自分の強みと弱みを把握することができた。はじめは聴衆をきちんと見ることができないほど緊張していたが、1週間に1度プレゼンテーションをこなし準備をしっかりとすることで、だんだん自信をつけ、講師やクラスメイトからもいい評価を得られるようになった。

3. 授業外活動

この研修が充実していたのは授業だけではなかった。ここでは、授業外の活動について簡単に述べたい。

まずイェール大学側が企画したものとしては、ニューヨークの国連本部訪問があった。ただガイドツアーに参加するだけでなく、各国大使 10 人ほどから話を聞くことができた。またイェール大学の生徒がサマースクールの生徒用に企画を用意しており、独立記念日に海辺に花火を見に行く企画や、映画を見に行く企画、ブロードウェイに格安のチケットでいく企画など様々だった。平日はハードな授業と課題をこなすので余裕がなかったのだったが、週末はこういった企画に参加して、思いっきり気分をリフレッシュし、また他のコースをとっているサマースクールの生徒との出会いを楽しんだ。

また、寮で同じフロアに住んでいた友達や同じコースをとっている友達と、ニューヨークやボストンに週末を利用して旅行にも行った。ハプニングも続出したが、その時そのメンバーでしか味わえなかった経験ができ、忘れられない楽しい思い出となった。

4. 今後に向けて

この研修で学んだことはとても多く、今後も維持していきたいと思っている。具体的には **Writing** で習得したスキルは修士論文を書く際に活用したいし、**Presentation** で学んだスキルは日本語でのプレゼンテーションにも応用して活用できると思うので、研究発表の場で活かしていきたい。また、**Speaking** のスキルは普段英語を使わないとなかなか維持が難しいので、今回友達になった子たちとオンライン電話 (**Skype**) で会話する、**Audacity** で定期的に録音を行うなどの方法で工夫して維持していきたいと思う。

最後に、今後東大からこのような素晴らしい研修を受ける人がもっと増えてほしいという願いをこめて、担当部署の方にはいくつか提言をさせていただきたいと思う。

まず、もっとこの研修の宣伝に力を入れていただきたい。わたしはたまたま教務課の掲示を見て知ったが、周りにはこの研修の存在自体知らない人が多く、掲示を見逃したことを非常に後悔していた。もっと大々的なポスターをつくり生徒の目につくようなキャンパス内の掲示板に枚数を増やして掲示する、教授を通して宣伝してもらう、説明会を開催す

るなどさらなる工夫が必要だと思う。イェール側のスタッフにも、もっと大勢の生徒に来てほしいということを直接言われた。

さらに、この研修の開催時期が夏学期の時期と重なっていることも参加者が少ない原因の一つだと思う。私自身も、受講していた語学のクラスの単位を諦めなければならなかった。他の機構がこの研修を取り仕切っているならまだしも、担当部署は東大内にあり、さらに私たちは東大から支援金をいただいて研修に参加しているのだから、当研修担当部署と教授陣で特別な措置を設けるようにしていただきたい。そのような工夫がなければ、この研修に参加したくても単位のために諦めるという生徒が続出してしまう。もし東大がこの研修を通して国際的に通用する人材育成に力を入れようとしているのなら、このような現状を改善する必要がある。

上記のような改善すべき点はいくつかあるものの、担当部署の方には応募時からお世話になり、大変感謝している。今後もこの研修が継続するよう、切に願っている。なにか経験者として今後お手伝いできることがあれば、気軽に声をかけていただきたい。

(Presentation Skill の授業最終日。左から 5 番目が講師。)



2009 年 6 月 28 日～8 月 7 日に、Yale 大学において開催された夏期英会話研修に参加した。本報告書では、Yale での授業およびその他の活動（オプションツアーなど）、生活、また、プログラムを通しての成果・交流について報告する。

1. 授業・企画

授業は、午前中に必修授業が 3 コマ（Reading, Writing, Listening & Speaking）、午後を選択授業が週 2 コマ×1 ないしは 2 クラスあった。

必修授業は、1 クラス当たりの人数が 10 人未満とされており、参加型の授業だった。また、同じ第一言語を話すもの同士が同一クラスにならない様、配慮されているように感じた。各コマのクラス分けは学期始めの Placement test に基づいて行われており、したがって授業内容もクラスにより異なるようであった。私の場合、Reading は小説を計 4 冊読み、主人公の心情や時代背景などを理解するという、日本における現代国語の授業のようなものだった。Writing はアイデンティティについて考えることをメインテーマとし、それを題材に表現力や語彙、文法を鍛える内容であった。学期末にはアイデンティティに関するエッセイを完成させることが最終課題とされていた。また、毎日、宿題として A4 2 枚程度の作文が課された。これは、文法的に正しい英語を書くためというよりは、英文を書くこと自体に慣れるための練習とされており、習慣付けとしてはとても良かったと思う。Writing のクラスのメインテーマは、友人に聞く限り、アイデンティティとは何か、幸福とは何か、など、クラスによって異なっているようだったが、おおよその授業の方法は他のクラスも同じだったようである。Listening & Speaking に関しては、私の所属していたクラスでは授業時間中の会話が重視されており、毎時間「おしゃべり」をする時間が設けられていた。そのほかにも、教員の知人や New Haven の警察官などを招いてプレゼンテーションをしてもらう機会があった。また、宿題としてレコーディングファイルの提出が課されていた。これは、教材や設定されたテーマについて 1 分程度で録音をし、それを提出して添削（コメント）してもらうというもので、個々人の弱点が直接指摘されるので、非常に良い方法だと思った。なお、他のクラスで、学期末に小劇を演じることが課題とされていたクラスがあり、最終週に公開発表会を行っていた。

全体としては、日本の受身の授業とは異なり、能動的な、参加型の授業であることを強く感じた。プログラム開始直後は、日本の習慣のせいかなかなか積極的にディスカッションに参加することができず、教員からもっと発言するよう求められることも多々あった。しかしプログラムの後半ともなると慣れ、より深く参加できるようになった。この点、ヨーロッパやラテンアメリカ出身の参加者はやはり積極的で、文化の違いが見られてとても

面白かった。

選択授業はさまざまなものがあり、(人数の許す限り)個人の好みで選択できるようになっていた。例としては、Pronunciation, Experience New Haven, Drama, Poetry, Film, Fiction, TOEFL, Controversial issue などがあつた。

私は1クラス(Experience New Haven)のみ受講した。全体の傾向は分からないが、友人の殆どは2クラス受講しているようだった。Experience New Haven では、New Haven の町や Yale の歴史を New Haven 市内の要所(Central Church, Court House(裁判所), Museum, NPO の活動箇所など)を訪ねながら学んだ。6週間も滞在したにもかかわらず Yale のある町のことを何も知らずに帰るのは勿体無いと考えていたため、この授業は私にとっては New Haven について知るためのまたとない機会となった。自分で町の中を歩いて外から眺めるだけでは分からない、歴史や背景を知ることができ、とても興味深かつた。

また、正規の授業の他に、週末や平日夜にはオプションのツアーやパーティ(ゲーム大会)などが企画されていた。週末のツアーには、独立記念日の花火見物や NY ブロードウェイミュージカル観劇、ろう人形館、遊園地、ビーチ、野球観戦などがあり、ブロードウェイは特に人気があつた。また、金曜夜には近くの映画館にバスで連れて行ってくれるツアーもあり、こちらも人気があつたようだった。私はニューヨーク・マダムタツソーミュージアム(ろう人形館)ツアーと金曜夜の映画館ツアーに参加したが、いずれも生の英語に触れることもでき、貴重な経験だつたと思う。

2. 生活

プログラムの参加者のほとんどは大学の寮(college)に滞在していた。計3つの寮に分散して滞在したが、各寮とも食堂や図書室、computer cluster(IDを持っていれば自由に使えるPC、プリンターが置いてある)、ランドリー、common room(団欒、自習スペース)などが備わっており、自由に利用することができた。私は図書室やcommon roomはほとんど利用しなかつたが、友人の中には毎日図書室で宿題をしている人も居たようだった。

寮の部屋は、渡米前に受け取っていた情報から全員2人部屋かと想像していたが、実際には1人部屋もあり、2人部屋はむしろ少なかつたように思う。2人部屋ならば否応無く英語でコミュニケーションする機会があり、今回の目的には即しているのではないかと思っていたため、1人部屋と言われたときには若干残念にも感じた。しかし部屋以外にも英語を話す(話さなければならない)機会は充分あり、特に気にする必要はなかつたと思う。また逆に、2人部屋の友人の話を知ると、生活パターンや文化の違いから若干苦勞する局面もあつたらしく、1人部屋で快適に過ごせたという点ではむしろよかつたのかもしれないと思った。

食事は朝昼晩とも時間が決められており、その時間内に食堂に行って各自好きなものを

とる、という方式だった。私は特に友人と約束することなく好きな時間に食堂に行っていたが、それでも食堂内で誰かしらには会うことができ、食事中も英語の練習（おしゃべり）という意味では困らなかった。食事の内容に関しては、アメリカ、メキシコ、イタリア系の料理で、個人的にはそれほど問題を感じなかった。一部には自国の食事を懐かしく思っ
て、また、自国料理を他国の友人に紹介する意味も込めて、誘い合わせて外のレストランなどに食べに出かけている人もいた。

3. 成果

私は、今回の短期留学の最大の成果は国外の友人ができたことだと思う。もちろん、授業内容も良いものだったが、現在の私にいちばん残っているのは、同じく英語を母国語とせず、同じように英語力を上達させようと努力している友人たちの姿だと思う。最初はやはり互いの母国語訛りの英語を理解するのに苦しんだが、次第に慣れ、それも聞き取れるようになってきた。これは同時に自分の英語が以下に拙いかをまざまざと見せ付けられる機会でもあったが、良い経験、薬になったと思う。一緒に参加していた日本人と話していたことだが、自分たちは日本の国内ではそれなりに英語に自信を持っているし、コミュニケーションも取れると思っていた、が、実際海外に来てみると全くそのようなことは無く、むしろ発話力の無さに落胆してしまった。

よく言われることだが、日本人は受験教育の成果で「(文法的に)正しい」英語を話したり書いたりすることはできる、しかし、コミュニケーションをとろうと思うと途端に弱くなる、と言われている。今回の留学はまさにこれを体感するものだった。先にも書いたが、ヨーロッパやラテンアメリカの人々と比べると、日本人は絶対的に消極的である。授業中も意見が無いではないが、自分の頭の中で正しい文章を組み立てていると完全に出遅れてしまう。一方で「積極的な」人々はたとえ文章が完成していなくても、単語しか浮かんでこなくても、とりあえずそれを口に出してしまう。考えてから動くか、動いてから考えるか、ということにもなるが、日本の常識はアメリカでは必ずしも通用しないということを実感した。どちらが良いともいえないが、英語を公用語とする国際社会で生きるのであれば、英語流の行動、思考パターンを身につけておくことは必要だろうと認識した。

今回、6週間をともに過ごした友人たちとは連絡先を交換し、現在もインターネットを通じて交流できる状態にある。今後また世界に出る機会があればネットワークはより広がると思うが、そのときには今回出会った人々から学んだことを活かせれば、そしてそれをまた彼らとの関係に活かせれば、と思った。

最後に、6週間の英語漬け生活は、英語を学ぶ点ではとてもよいものだが、次第に日本語が流暢に話せなくなっていく（特に、日本語でなくても通じてしまう単語が出てこず、日英混合の話し方になってしまう）自分には恐怖も感じた。アメリカでポスドクとして働く先輩に会う機会もあったが、彼女も過度の英語化を懸念していた。英語教育が重要とも言うが、日本語をまずしっかりしてから、という点では彼女とも強く同意してしまった。

イェール夏季英語研修

2009年のイェールで過ごした夏休みは、私の二十年の人生の中でも最高といっているほど貴重な時間となりました。海外の長期留学が初めてだったわたしにとって印象的であったと感じたこと考えさせられたことは、紙面では語りつくせないほどありますが、ここではその一部をご紹介しますと思います。

まずもっとも驚いたのは、イェールでの授業スタイルでした。十人程度の少人数クラスで、教授が提示したテーマについて議論するという授業スタイルがとられ、普段ゼミに慣れているはずの自分も最初は、ついていくのに必死でした。日本の大学のゼミでは、議論がなかなか続きません。ほとんどの場合、沈黙が続いて、結局は、教授が我慢できなくなってしゃべりまくるといことになりがちです。しかしイェールの場合は、まったく逆でした。先生よりも生徒が議論をリードする。そして先生が、そのような議論をうまい形ですくいあげ、授業が終わったあとには生徒みんなが授業をつくりあげたという達成感がうまれるのです。これは、ただ先生のいっていることをメモし、テストではきかせば優くなる日本の大学とは、大違いです。(もっとも僕の場合は、メモをし、吐き出すことが苦手ですが・・・)そして授業では、独創的な発言がなによりも大事にされます。みなが何かしら意見をもつことが期待され、ときには、先生もびっくりするような発想が生徒の側から出てくるのです。このような授業では、普段日本ではなかなか鍛えることのできない能力を養うことができました。

もうひとつ貴重であったことは、自分の中に育まれた「日本人らしさ」をわずかばかりながら理解できたことです。「世界は広い」とは、使い古された言葉ですが、まさにそれを体で感得することができました。中国、韓国などのアジアの人々だけでなく、ヨーロッパやイスラム圏の方々と知り合い、そしてお互い言葉には、苦勞しながらも同じ時間を過ごす中で少しずつわかりあっていくというのは、日本にはなかなかできない経験です。生活習慣も、思考方法もまったく違う文化を背負った学生が一同に会することで、僕は、自分の中に脈々と伝わる日本人らしさに気づくことができました。

最後にこれは、希望ですが、東大の学生は、もっと海外にでていくべきだと思います。とくに私の所属する法学部では、司法試験や国家試験などで日々単位をめぐる闘争と受験勉強に明け暮れて、海外留学などもってのほかという意見を持っているお友達もたくさんいます。また学部の方では、海外での単位取得は認められず、テスト期間も留学のことなどまったく考慮してくれません。イェールで出会った、北京大学の学生は学校からの全面的な支援を得てイェールに来ておりそれを誇りとしていました。頑迷なまでに日本国内の事情に固執する雰囲気は、けっして未来の東京大学にとって良いことではないと思います。

日本の一番の大学などという肩書は、海外ではまったく通じません。日本は、「ちっぽけ」な国であると知ることが、大切だと思います。そしてそんな「ちっぽけ」な日本にも世界のために「おおきな」仕事ができるということを認識する必要があります。

イエール夏季英語研修

